

---

# 君の声が届けば届くほど、苦しい

あかり

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

君の声が届けば届くほど、苦しい

### 【Nコード】

N8116Q

### 【作者名】

あかり

### 【あらすじ】

いつも一緒な秋穂、中村、大庭。

高校三年の冬、崩れていく三人の関係。

それぞれの視点から描く、もどかしい気持ち。

## 凍てつく指先

「わたし、秋穂くんのが好きなの。」

女の子特有の甘えた声が、私の耳を通過し鼓膜を震わす。

秋穂に関連することなら、こんな微かな音ですら拾ってしまつ自分の耳を少し恨んだ。

この言葉は、当然私に向けられたものなんかじゃない。

校舎の壁にぴたりと体を寄せ、角からちらりと覗き見をすると予想通りそこには秋穂の姿があった。

右手に持ったゴミ袋に、わずかに力が入る。

「中村？」

歩みを止めた私に不思議そうに声をかける大庭くん。

視線が秋穂に移ると、彼は納得したように私にならって黙り込んだ。

秋穂とわたしと大庭くんは、いわゆる悪友である。

よく言えば社交的、悪く言えばチャライ秋穂

真面目で成績もよく、教師受けのする大庭くん

至って普通の特になにかあるわけでもないわたし

偶然にして、高校三年間を同じクラスで過ごすうちに私たちは自然と仲良くなった。

それぞれ違つところだらけの三人だから一緒にいて退屈することはなかった。

テニス部に所属し、大会でも何度も優勝している秋穂。大学も推薦で決まっており受験シーズンのいま、暇を持て余しているくらいである。

そんな秋穂はモテる。

あかるい茶色の髪にふわりとパーマをかけ、人懐っこい笑顔を見せて、フレンドリーな物腰を持つ彼は男女ともに人気がある。

それにもまして、テニスをしている時の秋穂はとてもかっこいい。いつもの子犬のような笑顔は封じ込められ、スポーツマンの顔をする秋穂に女の子はころっと落ちる。

わたしも、そのうちのひとりだった。

でも、秋穂には常に彼女がいた。それは一人の時もあれば二人の時も三人の時もあった。

彼は女癖が悪いのだ。

そんな秋穂のそばにいられるのなら、友達でいい。

そう感じた一年前の夏。

いつか終わる日が来る彼女というポジションなんて、いらぬ。

でも、やっぱり嫉妬しないわけじゃない。

秋穂に近づく女の子がいやでいやで仕方がない。

俯き加減の私のことを大庭君が「大丈夫か？」なんて聞いてくる。大庭君は優しい。

いまだって、大庭くんは掃除当番でもないのに私がゴミ捨てに行くといつてゴミ袋を持って歩いていたら

「手伝うよ」なんて爽やかな笑顔を浮かべて二つのうち一個を持ってきて、寒いのにわざわざ校舎裏のゴミ置き場までついてきてく

れて

そして、動けずに立ち尽くしてる私に付き合ってくれている。

たぶん、大庭くんは私が秋穂のことを好きだってことに気付いてい  
るんだろうなあ。

だって、ずっと私たちは一緒にいるんだもの。

お昼休みも、お互いが部活のない日の放課後も、たまの休日も、わ  
たしたちは三人でひとつだった。

だからこそわかる。

秋穂がこの告白にオーケーするってことぐらい。

「来るものは拒まず去る者は追わず」が彼のモットーであり、その  
言葉どおり、秋穂はその時彼女がいろいろがいがまいが、女の子と付き  
合う。

みんなそれを知っていて、告白してくる。

校舎の壁を隔てて存在する、あのかわいらしい声の女の子だって知  
っているに違いない。

心配してくれる大庭くんには悪いけど、あまり大丈夫じゃない。目  
頭が熱くなって涙が止まらない。

自分で秋穂の友達であることを選んだというのに、どういうことだ  
ろう、自分の矛盾にいらだつ。

もし私があの子みたいが好きだと言ったら、秋穂はわたしと付  
き合うのだろうか。

でも、私はたくさん彼女の一人になるのがいやなのだ。

よくばりかもしれないけれど、わたしは秋穂の一番になりたい。

どれくらいそこにいただろうか。

指の先の感覚がなくなるくらい手が冷えて、吐く息の白さに視界がぼやける。

日が落ちはじめ、教室の光もまばらになってきた。

秋穂と女の子は、とっくにいなくなっていたのに、私はそこから動けなかった。

告白の結果も聞こえなかったし、盗み見ることももうできなかった。見たくもなかった、秋穂が女の子と一緒にいるところなんて見たくもなかったのだ。

秋穂はいつも彼女より、三人でいることのほうを優先してきてくれた。

それが秋穂から女の子が去っていく理由の一つにもなっていた。

そのことに少し優越感を感じていたのだ。私のほうが彼女たちよりも秋穂と一緒にいる時間は絶対長いのだという自負があった。

けれど、所詮私たちは三人であり、彼女というポジションを持つ女の子に私は勝てるわけもなかった。

彼女と秋穂が二人という場面を見るたびに心が潰れそうになった。そういうときはいつも、泣いた。いつもは一人で泣いていたけど、今日は大庭くんが隣にいる。

涙がまらなかった。大庭くんになら見られてもいいと思った。ひとりでこの気持ちを抱えることができなかった。

「俺、中村のことが好きなんだ。」

大庭くんは突然ぼつりと壁にもたれ掛かったままで言った。

こんなときにごめん、と彼は申し訳なさそうな顔をしながら私に謝った。そして、彼の暖かい手は私の頬を伝う涙をふき取った。

どうして大庭君の手はこんな寒い日にもあつたかいんだらう。謝らなくていいのに、大庭くんは律儀に謝る。謝らなきゃいけないのは私のはずなのに。

大庭くんが私のことを好きだということに、私は少し前から気づいていた。

だって私たちはいつも一緒にいたんだから。

私が秋穂を見ているとき、大庭くんは私のそばにいてくれた。

どうして、私は秋穂なんかを好きで、大庭くんを好きにならなかつたのだらう。

今まで何度も何度もそんなことを考えてきた。

真面目で、優しく、さわやかで。好青年という言葉がしっくりくる大庭くん。

そんな彼を好きになってもおかしくないはずなのに

秋穂を好きだという気持ちが無くなってくれない。

恋人になることを諦めてもなお、秋穂は私のこころを揺さぶり続けるのだ。

誰かほかの人のことを好きになることも許されなのまま、私は今まで三人という関係の中から出られなかった。

ここで、流されてしまってもいいのだろうか。大庭くんの好意を受け取ってもよいのだろうか。

大庭くんを好きになれば秋穂のことを忘れられるのかなあ。

否、そんな簡単に忘れられるわけがない、だって私たちはいつも一

緒にいるんだもの。

私が秋穂のことを忘れられるわけがない。

「わたし、絶対に大庭くんのこと傷つけちゃうよ」

「それでもいいんだよ。いっぱい傷つけてくれていい。」

大庭くんは、いつもみたいに困ったような顔で笑った。

温かい手に縋り付いてしまいたくなる衝動を押さえられない。

「中村が傍にいてくれるんなら、なんだっていいんだ」

それは殺し文句だった。

傷つけてもいいんだなんて、そんなこと言われたら。

わたしは誰かにそばにいてほしかったのだ。

三人でいるだけじゃ、さみしさは埋まらなかった。泣きたいときに一人で泣くのはもう嫌だった。誰かに涙をぬぐってほしかった。

もう、秋穂じゃなくてもよかった。

だから、私はいまから大庭くんのことを好きになる。後悔してもいい。

「一番に…してくれる？私を大庭くんが一番にして。」

口から出た言葉は余りにもずうずうしくて、目もあわせられない。

私が一番は秋穂で埋まっているというのに、私を大庭くんが一番にしるだなんて。



大庭くんは一瞬驚いたような表情をしたけれどすぐに私の手を握ってくれた。

その暖かい手を握り返す。私は罪悪感と共に幸せを得るのだと、自分に言い聞かせた。

手をつないだまま教室へ戻ると秋穂がそこにいた。

「おつ、中村に大庭じゃん。聞いてよ、さつきさあー」

窓から差し込む夕日が明るい秋穂の髪をオレンジ色に染めあげる。

その鮮やかなオレンジが私は好きだった。

そう、とても好きだった。

「俺達付き合うことにしたんだ。」大庭くんの声が秋穂の話さええぎった。

じんわりと大庭くんの体温が私の手を包み込んでくれる。

秋穂はちらりとつながった手を見ていつものへらへらしたような笑顔になった。

「おめでとつ。」

つないだ手に視線を向けた時、一瞬だけれど揺らいだ、君の瞳が未だに私を苦しめる。

愛してほしかった、他の誰かじゃなくて

大庭と付き合うようになってから、中村は変わったと思う。まずロングだった髪の毛がぱつぱりと切られボブになった。

短い髪の中村は新鮮で、切りそろえられた毛先がふわりと揺れるたびに目を奪われた。

つぎに、纏う雰囲気が変わった。

いつもダルそうどこか投げやりな物腰だった中村に、笑顔が増えた。

それまでは、俺と大庭以外をあまり寄せ付けないような感じだった中村の雰囲気是和らいだ。

「なかむらー、おまえ、急に髪切ったから失恋したのかと思ったのに。」

「なんだ、大庭と付き合い始めたんだって？まどろっこしいことするなよ！」

クラスメイト達が、大庭と中村が二人をからかうような光景がよく見られた。

そんな時、ちょっと恥ずかしそうに笑う二人は健全な高校生カップルの見本のようで、クラスではほほえましく見守られていた。

そして、

俺と中村と大庭の三人で過ごす時間は、格段に減った。

あの二人が一緒にお昼ご飯を食べたり、放課後に受験勉強をしたりするとき、俺は時間を持て余すようになり、「彼女」と遊んだ。

大庭と中村が付き合うようになったあの日にできた彼女と過ごす時間が多くなり、それを彼女は喜んだ。

さみしくはない、ひとりではないから。でも、満たされない。

だって、いままで、いつも三人でいたのだから。

俺に新しく彼女ができるたび、必ずと言っていいほど次の日に中村は目を腫らして登校してきた。

それを誤魔化そうと、いつもよりメイクを濃くして学校にやってくる中村に俺も大庭も気付かないわけなかった。

しかし、あの日からその習慣は失われた。

中村にとっての俺はもう泣く価値もない男になってしまったのだろうか。

中村の気持ちに気付いていながら、俺はほかの女の子と付き合い続けていた。

それは中村のことが嫌いとかそういう理由ではなくて、ただの自惚れが俺にそうさせた。

恋愛は脆い。

人はすぐ人を好きになり、そして、すぐに嫌いになってしまうこともある。

過去の女の子たちの付き合いが俺にそう教えた。

女の子はみんなかわいい。

けれど、中村はかわいいだけじゃない。

中村はほかの女の子と違う。俺のことをまっすぐ見てくれていた。

中村だけはいつまでも俺のことを好きでいてくれると信じていた、永遠に俺のことを思っ泣いてくれると勝手に信じ込んでいたのだ。

だが、あの日を境に大庭と中村は付き合うことになった。

大庭が中村の弱みに付け込んだからといって、俺がそれを非難する資格もない。俺は漬け込むことすらしなかったのだから。

そして中村が大庭を利用していることも俺には分かっていた。

大庭と付き合いはじめてから、中村は吹っ切れたように明るくなった。

そして、きれいになった。

「…ねえ、あきほ！…ちゃんと聞いてる？」

中村の声で俺は現実に引き戻される。

珍しく俺と中村の二人だけが放課後の教室に残っている。こんなこと、いつぶりだろうか。

ちよつと怒っているかのように首をかしげながらこちらを見てくる中村。さらりと首筋で彼女の黒髪が揺れた。

「ごめんごめん。なんだっけ？」

「ねえ、大庭くんがクリスマスに何が欲しいか知らない？」

今日は大庭が委員会の会議に行っていた。大庭はクラス委員長をしている。

誰も居ない教室で、こうやって中村が俺に大庭へのプレゼントについて相談をするだなんて、前は想像も付かなかった。

去年は三人でクリスマススイブにわざわざ遊園地に行つて、カップル

を押し分け観覧車に乗った。

こいつは、今年も観覧車に乗りに行くのだろうか？  
ふたりで

雑誌のクリスマス特集のページをめくりながら、あーだこーだ悩む  
中村を見つめながらそんなことを思った。

悩む中村は、笑顔で、幸せそうで、その笑顔が俺に向けばいいのに  
と柄にもなく思った。

「大庭はなんでも喜ぶだろ、中村がくれるんなら」

「そーというのが一番困る…」

その時だった、中村のケータイが机の上で音を立てながら震えた。  
画面を除いた時の君の顔と言ったら、直視できないほど嬉しそうで、  
俺は直感で「大庭からだ」と思った。  
それは大当たりで

「大庭くんが会議終わったから校門で待ってるって。行かなきゃ。」

そういつて、忙しなくがちゃがちゃとボールペンや雑誌を鞆へとし  
まう様子が、とても悔しかった。

その笑顔は俺に向けられるはずだったのに。  
いつでも届くと思っていた中村はいつの間にかおれの手の届かない  
場所にいた。

「じゃあね、秋穂。話聞いてくれてありがと。」

ドアに向かおうとした中村の腕を俺は無意識につかんでいた。

ぎよつとしたように彼女は俺のことを見つめて、小さな声で、どうしたの？と続けた。

ああ、感情が抑えられない。言葉にできないこの感情を。

「ねえ、夏実。俺のこと、まだ好き？」

掴んだ細い腕から、中村の体がこわばったのが感じ取れた。

中村の名前を呼んだのはこれが初めてだった。ほんとうはずっと名前前で呼びたかった。

夏実、夏実、夏実夏実夏実。

なんどだつて呼ぶからさ、ねえ、俺のところに戻ってきてよ。

もう戻れない、それでも聞かすにはいられなかった。

だめだとわかっていてもかっこ悪くても、俺のほうをもう一度見てほしかった。

ちらりとでもいい、友人の杵から外してほしかった。だつてだつて、欲しかった未来はこんなものではなかったのだから。

あの日と同じように夕日が教室に差し込む。

やわらかく照らされる俺たちの間に流れる沈黙を破ったのは中村だった。

「お願い、離して。晴之が待ってる。」

体中に冷たい水を浴びせられたようだった。

晴之、中村は大庭のことを晴之と呼んだ。俺の前では、大庭くん、としか呼んでいなかったのに。

俺の知らない中村と大庭の二人の時間が存在しているのだ。あの日までは、俺たちはすべての時間を共有していたというのに。

緩んだ俺の手をそつとほどいて、中村は教室から出て行った。

窓から見つめた校門では、大庭が中村を待っているのが見えた。

二人そろった姿を見たくなくて、俺は窓から目をそむけだれもない教室をぼんやりと見つめた。

俺が握ることができない彼女の手を大庭は握るのだろう。

大庭なら、中村を傷つけることはないのだろう。俺と違って、大庭は優しい。

けれど、本当は、俺は君にそばにいてほしかったんだ。

愛してほしかった。ほかの誰かじゃなくて。

愛してほしいかった、他の誰かじゃなくて（後書き）



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8116q/>

---

君の声が届けば届くほど、苦しい

2011年10月8日18時14分発行